

青年の「恋愛離れ」における社会的閉塞感の影響¹

南 学

Effect of sense of social stagnation on uninterested to love in adolescent

Manabu MINAMI

要 旨

近年青年の「恋愛離れ」が指摘されている一方で、青年の生活満足度は高くなっている。この現象に関して、古市（2011）は、社会的閉塞感から将来に明るい展望が持てないために、「今、ここ」の幸せに満足しているのではないかという仮説を提唱している。本研究では、この仮説を実証的に検証するため、時間的展望体験尺度と価値観を測定し、検討をおこなう。また、併せて恋愛イメージを測定し、それとの関連を検討した。

結果は、「現在の充実感」において女性のほうが高く、「自己沈潜的人生観」において恋愛不要群が高かった。また、恋愛イメージに関してクラス分析をおこない、それぞれ2群に分けたところ、恋愛不要低群・男性において「希望」が有意に低かった。これらの結果から、一部の男性においてとくに社会的閉塞感の影響が強いことが示唆された。

問 題

青年が恋愛をすることによって成長するという点については、これまでも数多くの研究が明らかにしている。天谷（2007）は、恋愛経験のある人のほうが、そうでない人よりも自分や他者に対して信頼感をもっていることを示している。神薊・黒川・坂田（1996）は恋人の有無が自尊心と充実感、抑鬱の程度に関連することを示しており、北原・松島・高木（2008）は、恋人の有無、恋愛回数、長期交際の経験がアイデンティティの確立に影響することを示した。多川（2003）は、面接調査をおこない、恋愛関係は精神的安定をもたらし、対人関係観にも影響を与えることを見出している。また、堀毛（1994）は、過去または現在の恋愛経験が社会的スキルを高めることを示した。ただし、高坂（2009）は、現在の恋愛関係が「自己拡大」や「充足的気分」、「他者評価の上昇」などポジティブな影響をもたらす一方で、「拘束感」や「関係不安」、「経済的負担」、「生活習慣の乱れ」のようなネガティブな影響もあることを示している。

他方で、近年若者の「恋愛離れ」が指摘されている。国立社会保障・人口問題研究所（2010）の「第14回出生動向基本調査」では、未婚者の異性との交際状況において「交際している異性はいない」と回答した男性は61.4%、女性は49.5%と過去最高となっている。「一生結婚するつもりはない」との回答も男性は9.4%、女性は6.8%と、過去最高になっている。また、近年の青年期男性の恋愛に対する消極性を指す用語として、「草食男子」という表現も出てきている（深澤，2007）。恋愛がよい影響をもたらすにもかかわらず、なぜ近年の青年は「恋愛離れ」になってしまうのだろうか？

¹ 本研究は、三重大学教育学部卒業生の和井田麻奈美が提出した卒業論文『恋人を欲しいと思わない青年の研究』を再分析し、加筆修正を加えたものである。

現代の若者の価値観に関しては、恋愛離れに限らず、消費離れ、政治離れなどといったさまざまな意欲が低下していることが指摘されている。山岡（2009）は、日経産業地域研究所が実施した調査において、首都圏の20代の若者の2000年から2007年にかけてのモノの保有率を調査して、保有率の比較をおこない、デジタルカメラや携帯電話、クレジットカードを除いてほかのすべてのモノの保有率が低下していることを示している。この中には、有名ブランド品やスポーツ用品、乗用車などが含まれている。また、政治離れに関しては、明るい選挙推進協会（2013）によると、20代の衆議院議員総選挙投票率は昭和44年以降の世代よりも低く、かつ全体として低下傾向にあることが示されている。

こうした「消費離れ」の背景には、現在の国内経済の低迷やそれに伴う諸問題などの社会的閉塞感が若者に影響していることが考えられる。今の若者はいわゆるバブル崩壊以降の国内経済の低迷期「失われた20年」に育ってきており、景気がよい時期というのをあまり経験していない。また、それでも家庭には家電やパソコンなどがひとつとおり揃っており、これ以上欲しいものがない状況にある。加えて、近年の大卒者の就職難などもあり、若者の可処分所得が減少していることも考えられるだろう²。こうした経済的苦境が消費や恋愛に目が向かなくさせていることは十分にあり得ると思われる。

しかし、古市（2011）は、内閣府（2010）の「国民生活に関する世論調査」において、20代の若者の生活満足度が高いことに着目し、次のような仮説を提唱している。景気が低迷しており、将来においても「少子高齢化」や「財政赤字」「原発事故」など明るい展望が見出しにくい国内状況にも関わらず現代の若者の生活満足度が高いのは、将来に希望がもてないために「今、ここ」の幸せに関心を向け、満足しているという仮説である。すなわち、「若者の幸福感が高いのは、もはや自分がこれ以上は幸せになるとは思えない時、人は『今の生活が幸せだ』と答えるしかない（古市，2011）」という解釈である。これを裏付けるものとして、古市（2011）は、高齢者の生活満足度も高いことを指摘している。言い換えると、現代の若者は、高齢者が「今より幸せになる将来」を想定できないのと同様に、将来への希望を持つことができず、社会的閉塞感を感じていると古市（2011）は考えているのである。

この仮説を恋愛に敷衍するならば、近年の「恋愛離れ」も同様に社会的閉塞感の影響を受けていることが予測される。しかし、古市（2011）の仮説は統計的資料からの解釈と思索に拠っており、実証的検討がなされていない。そこで、本研究では、大学生を対象として、この点を実証的に検証することを目的とする。

社会的閉塞感の指標として、本研究では、時間的展望体験尺度（白井，1994；1997）を用いる。時間的展望は「ある一定時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」と定義されており（Lewin, 1951）、個人が現在の状態を過去や未来と関連づける働き（白井，1994）である。社会的閉塞感が若者に影響を与えているならば、時間的展望のとくに未来への指向に関連する因子に影響を与えていることが予想される。奥田（2013）は、論文データベースから「時間的展望」を含む論文を抽出し、年代別に時間的展望の得点を比較し、ばらつきが小さくなり、一部の因子において得点の低下が見られることを見出している。

時間的展望の指標としては、サークル・テスト（白井，1989）もあるが、近年は時間的展望体験尺度（白井，1994）がよく用いられており、5段階評定であり集計も容易であることから、本研究ではこちらを使用する。下位因子は、「目標指向性」、「希望」、「現在の充実感」、「過去受容」があるが、本研究では「過去受容」を除いた「目標指向性」、「希望」、「現在の充実感」の下位尺度を用いる。

また、若者の価値観の指標として、辻岡・村山（1975）の価値観尺度から「自己沈潜的人生観」と「努力的人生観」の尺度を用いる。「自己沈潜的価値観」は、他者と関わらず自己の内面生活を充実させ

² このほかにも若者人口の減少も考慮する必要があり、一部の「消費離れ」の指摘は妥当でないと考えられる。

たいという価値観であり、「努力的人生観」は、困難な問題に立ち向かい、それを乗り越えることに価値を置くものである。古市（2011）によると、現代の若者の価値観は変容してきており、以前のような立身出世を求めるのではなく、身の回りで小さな喜びを感じられることを求めている。こうした変化を捉える目的で、「自己沈潜的人生観」と「努力的人生観」の尺度を用いる。

「恋愛離れ」に関して、高坂（2011）は、恋愛群、恋愛希求群、恋愛不要群の大学生を比較し、恋愛不要群がアイデンティティの確立が低いこと、精神的健康度が低いこと、「独断性」得点が高いことを見出した。高坂（2011）は、恋愛に興味がない若者の発達的特徴を見出した点で興味深いものであるが、社会的閉塞感との関係が検討されていない。また、恋愛不要群であっても恋愛に対する姿勢によって社会的閉塞感が大きく異なる可能性もある。そこで、本研究では、高坂（2011）の分類に拠って、恋愛イメージの点でさらに分類することで、より詳細に検討をおこなうことを目的とする。

恋愛イメージ尺度（金政，2002）は、特定の相手に対する恋愛の類型をおこなうのではなく、一般的な恋愛をどのようにとらえているのかを測定するものである。下位因子として、「独占・束縛」、「成長」、「献身的」、「衝動・盲目的」、「大切・必要」、「刹那的・付加価値」、「相互関係」があり、このうち、「刹那的・付加価値」因子は「恋愛なんて所詮アクセサリのようなものでしかない」というようにネガティブな項目が集まっている一方、他の因子は概してポジティブな項目となっている。因子間相関においても「刹那的・付加価値」と他の因子の相関はみな負の相関となっている。

方 法

調査参加者 欠損値を除いた大学生 271 名（男性 135 名、女性 136 名、平均年齢 18.6 歳、 $SD=.79$ ）。

質問紙の構成 時間的展望尺度（白井，1994；1997）、価値観尺度（辻岡・村山，1975）から「自己沈潜的人生観」と「努力的人生観」、恋愛イメージ尺度（金政，2002）、恋愛状況に関する質問（高坂，2011 による）。

手続き 授業時に質問紙を配布し、回収した。

結 果

高坂（2011）に倣い、恋愛状況によって恋愛群、恋愛希求群、恋愛不要群に分類した（表 1）。恋愛状況の性差については有意な差は見出されなかった（ $\chi^2(2)=1.14$, n.s.）。

表 1 恋愛状況と性差のクロス集計表

| | 恋愛群 | 恋愛希求群 | 恋愛不要群 |
|----|-----|-------|-------|
| 男性 | 24 | 74 | 37 |
| 女性 | 31 | 68 | 37 |

$\chi^2=1.14$, n.s.

恋愛状況と性における時間的展望体験尺度得点

恋愛状況と性における時間的展望体験尺度の下位因子得点を比較した（図 1）。分散分析の結果、「現在の充実感」において性の主効果が見出され（ $F(1,265)=6.32$, $p<.05$ ）、女性のほうが高かったが、恋愛状況の主効果は見出されなかった。

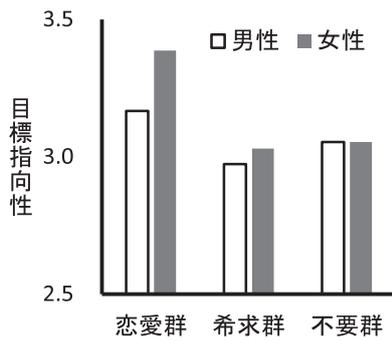


図 1-a 恋愛状況と性別における「目標指向性」

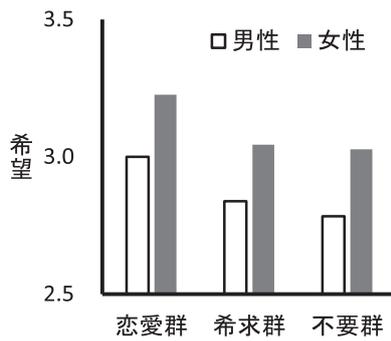


図 1-b 恋愛状況と性別における「希望」

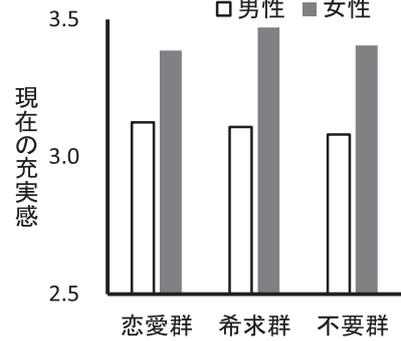


図 1-c 恋愛状況と性別における「現在の充実感」

恋愛状況と性における価値観得点

恋愛状況と性における価値観尺度の下位因子得点を比較した(図2)。分散分析の結果、「自己沈潜的人生観」において群の主効果が有意であり ($F(2,265) = 9.30, p < .01$)、恋愛不要群のみが有意に高かった。また、「努力的人生観」において性の主効果が有意であり ($F(1,265) = 4.08, p < .05$)、女性のほうが高かった。

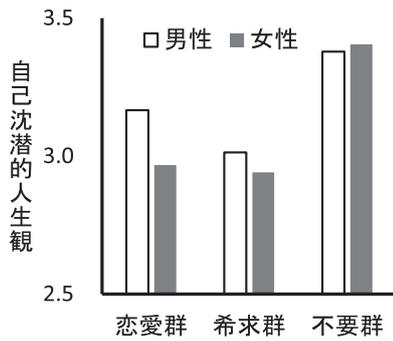


図 2-a 恋愛状況と性別における「自己沈潜的人生観」

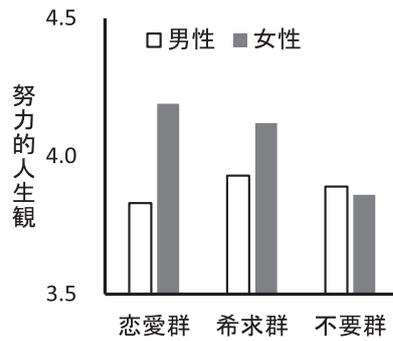


図 2-b 恋愛状況と性別における「努力的人生観」

恋愛イメージ尺度によるクラスタ分析

恋愛状況の各群に対して、恋愛イメージ尺度得点によりクラスタ分析(Ward法)をおこなった(図3)。各群を2群に分けたところ、いずれも恋愛イメージが全般的に高いクラスタと低いクラスタに分かれたため、それぞれ高群、低群と呼ぶことにする。なお、恋愛低群の人数が少ないため、恋愛高群と結合し、以下の分析では、恋愛群、希求高群、希求低群、不要高群、不要低群の5群で比較をおこなった。

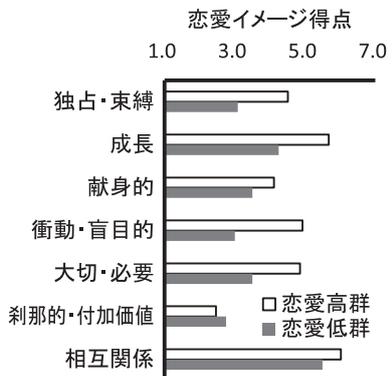


図 3-a クラスタの特性 (恋愛群)

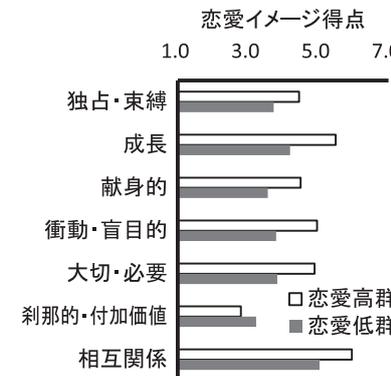


図 3-b クラスタの特性 (恋愛希求群)

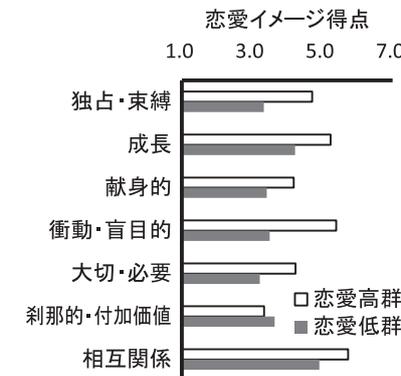


図 3-c クラスタの特性 (恋愛不要群)

恋愛状況とクラスタと性における時間的展望体験尺度得点

5 (恋愛群、希求高群、希求低群、不要高群、不要低群) × 2 (男女) で時間的展望体験尺度得点を比較した (図 4)。分散分析の結果、「希望」因子において交互作用が有意であり ($F(4,261) = 4.05, p < .01$)、不要低群・男性が有意に低かった。

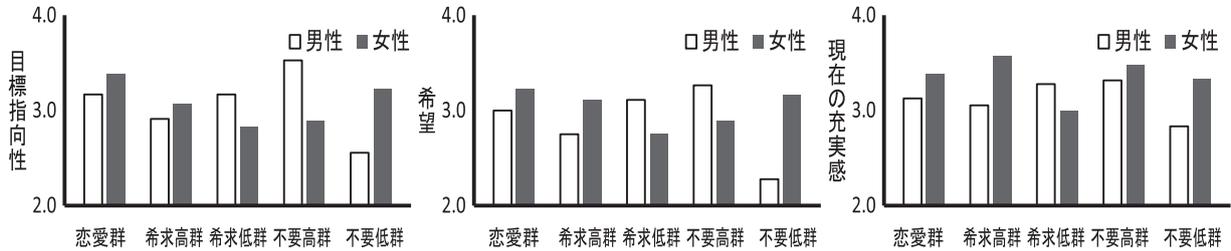


図 4-a 恋愛状況とクラスタと性における「目標指向性」 図 4-b 恋愛状況とクラスタと性における「希望」 図 4-c 恋愛状況とクラスタと性における「現在の充実感」

恋愛状況とクラスタと性における価値観尺度得点

同様に、価値観尺度の下位因子得点を比較した (図 5)。分散分析の結果、「自己沈潜的人生観」において群の主効果が有意であり ($F(4,261) = 5.70, p < .01$)、不要低群のみ高く、「努力的的人生観」において群の主効果が有意であり ($F(4,261) = 3.95, p < .01$)、不要低群のみが低いことが見出された。

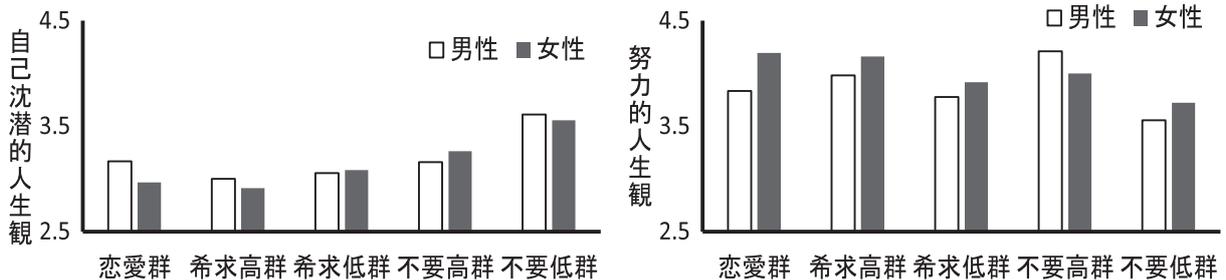


図 5-a 恋愛状況とクラスタと性における「自己沈潜的人生観」 図 5-b 恋愛状況とクラスタと性における「努力的的人生観」

考 察

恋愛状況と性における時間的展望

図 1、2 より、概して恋愛群のほうが恋愛希求群や恋愛不要群よりも時間的展望体験得点が高くなっており、恋愛に充実している者は明るい将来展望を持っていることが見出された。また、概して女性のほうが時間的展望体験得点が高く、「努力的的人生観」が高くなる傾向が見られた。女子大学生は男子大学生よりも就職への圧力が強くない (浦上, 1996) ことや、女性は大学卒業後もフリーターになる割合が高い (厚生労働省, 2013) など、女性のほうが近年の就職難や将来の見通しの描きにくさの影響を直接受けにくいと、社会的閉塞感を感じにくいと考えられる。

恋愛状況とクラスタと性における時間的展望

図 4 より恋愛不要低群・男性のみにおいて時間的展望体験得点が低くなることを見出された。男性で恋愛を望まないだけでなく、恋愛に対するイメージがネガティブな場合に、とくに社会的閉塞感の影響

を受けやすい可能性が示唆された。古市（2011）の仮説には、社会的閉塞感の影響に関して性差のことが触れられておらず、この傾向は本研究ではじめて明らかになった点である。また、併せて、社会的閉塞感の影響を強く受けるのは、恋愛イメージがネガティブな場合に限られることもはじめて見出された。本研究の結果からは、恋愛イメージがネガティブで、かつ恋愛に興味をもたないことを選択した人のうち、とくに男性は社会的閉塞感の影響を直接受けやすいと考えられる。社会的閉塞感と恋愛イメージの悪化のどちらが原因であるのかについては本研究では特定できないが、今後解明していくべき問題であると思われる。

恋愛状況とクラスと性における価値観

図5より「自己沈潜的人生観」は恋愛不要低群・男性のみにおいて高くなることを見出された。また、「努力的人生観」は恋愛不要群において低くなることを見出された。上述の時間的展望に関する結果と併せて考えるならば、社会的閉塞感の影響を強く受ける恋愛不要低群・男性は、恋愛など他者との関係よりも自己の内面生活に向かいながら生活したいと考えていると解釈できる。それは、次々に現れる問題を解決するよりも避けることを選び、自分の殻に閉じこもることを求めていると考えられる。

こうした、恋愛を拒み、他者との関係よりも自己の内面生活に向かうといった特徴は、斎藤（2000）が挙げる「おたく」像に重なるところが多いとみることもできるが、「おたく」に関して性によって社会的閉塞感の影響の点で違いがでるか否かについては今後の検討課題であるといえよう。

古市（2011）の仮説では、性差を考慮せず社会的閉塞感の影響を論じているが、本研究からは、すべての恋愛不要群が社会的閉塞感を受けているわけではなく、男性でかつ比較的恋愛イメージがネガティブな者に限られることを見出された。解釈の点からは、社会的閉塞感は「恋愛離れ」の原因というよりも、むしろ恋愛イメージや自身の性の要因の結果として表れるものと考えられるほうが整合的であると思われる。

引用文献

- 明るい選挙推進協会 2013 衆議院議員総選挙年代別投票率の推移
http://www.akaruisenkyo.or.jp/070_various/071_syugi/693/（2013年10月28日時点）
- 天谷祐子 2007 恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動：大学生を対象として 東海学園大学研究紀要 人文学・健康科学研究編 11/12, 17-31.
- 深澤真紀 2007 平成男子図鑑 リスペクト男子としらふ男子 日経 BP 社
- 古市憲寿 2011 絶望の国の幸福な若者たち 講談社
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 神薊紀幸・黒川正流・坂田桐子 1996 青年の恋愛関係と自己概念及び精神的健康の関連 広島大学総合科学部紀要IV理系編, 22, pp.93-104.
- 金政祐司 2002 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から— 対人社会心理学研究, 2, pp.93-101.
- 北原香緒里・松島公望・高木秀明 2008 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響 横浜国立大学教育人間科学部紀要：教育科学, 10, 91-114.
- Lewin, K. 1951 Field theory in social science: Selected theoretical papers. New York: Harper & Brothers. (猪俣佐登留 (訳) 1979 社会科学における場の理論 (増補版) 誠信書房)
- 内閣府 2010 「国民生活に関する世論調査 (平成22年6月)」
- 奥田雄一郎 2013 大学生の時間的展望の時代的変遷—若者は未来を描けなくなったのか— 共愛学園前橋国際大

- 学論集, 13, 1-12.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2010 第14回出生動向基本調査「結婚と出産に関する全国調査－独身者調査の結果概要」
- 高坂康雅 2009 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂康雅 2011 “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討 青年心理学研究, 23, pp.147-158.
- 厚生労働省 2013 平成25年版 労働経済の分析－構造変化の中での雇用・人材と働き方－
- 斎藤 環 2000 戦闘美少女の精神分析 太田出版
- 白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造(2):サークル・テストとライン・テストの結果から 大阪教育大学紀要IV(教育科学), 38, 183-196.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65(1), pp.54-60.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 多川則子 2003 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 50, 251-267.
- 辻岡美延・村山 繁 1975 価値観の六次元－因子的真实性の原理による尺度構成－ 関西大学社会学部紀要, 7, pp.161-174.
- 浦上昌則 1996 女子短大生の職業選択過程についての研究－進路選択に対する自己効力感, 就職活動, 自己概念の関連から－ 教育心理学研究, 44, 195-203.